

# 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の生い立ち

廣谷 速人

京都市

## 第1章 はじめに

京都医科大学整形外科学講座初代教授松岡道治の事績、業績に関して、著者はこれまでに、講座設立の経緯<sup>1)</sup>、松岡の学術的活動<sup>2-5)</sup>、松岡の留学<sup>6)</sup>と教室の諸状況<sup>6)</sup>、さらには松岡の生涯に亘る学歴<sup>7)</sup>を報告してきた。今回は、松岡の生涯のうち、その生い立ちについて述べる。

## 第2章 家系と生年月日

### 第1節 家系

松岡道治に関する戸籍<sup>8)</sup>によれば、松岡は父松岡藤藏<sup>9)</sup>と母トモ<sup>10)</sup>の次男として生れた。その家系は図1<sup>11)</sup>に示す通りである。一族には、松岡の養子震三(松岡洋右の三男)<sup>11⑥)</sup>のように華族と縁組したもののほか、岸信介、佐藤栄作、安部晋三の3名の内閣総理大臣経験者がおり、さらに遠くは吉田茂、麻生太郎両元総理大臣とも連なっていて、極めて華麗であるとともに、一族の結束は固い。

### 第2節 生年月日

松岡の生年月日は、内藤一男元松岡病院院長<sup>12)</sup>が紹介した履歴書のコピー写真<sup>13,14)</sup>(図2)に基づいて、従来明治4(1871年)12月5日とされてきた。

この履歴書の様式は、九大整形外科学講座初代教授住田正雄の履歴書と同一である(私信。小林晶博士、平成16年3月26日)ので、当時の文部省の公式文書であったと推定できる。しかしこれらコピー、写真を詳細に見ると、本籍地、生年月日などの欄の外枠が欠損していて、そこに矩形の

紙片が貼られていて、その上に他の部分と異なる筆跡で本籍地、生年月日などが書き込まれていると判断できる。その筆跡は、履歴書の最後の頁である大正2年の欄への記入されている文字<sup>14)</sup>、さらには内藤が紹介した松岡のメモの筆跡<sup>13)</sup>と一致しているので、この履歴書は、公式の履歴書に後年新たに紙片を貼り、松岡本人が書き直したものであると判断することが出来る。

一方、松岡在学中の各『第一高等中学校一覽』<sup>15-17)</sup>の生徒姓名欄に記載されている松岡の生年月はいずれも「明治2年11月」となっているだけでなく、戸籍<sup>8)</sup>や家系図<sup>9)</sup>にも明らかに「明治2年11月2日生(新暦で明治2年12月27日)」と明記されている。

以上から松岡の生年月日は、明治2(1869)年11月2日(新暦では同年12月4日)と断定できる。しかし、履歴書が明治4年生まれと松岡自身によって書き換えられた理由は不明である。

## 第3章 松岡の本籍地とその移籍

### 第1節 本籍地の正確な地名

松岡教授の本籍地については、従来上述の履歴書<sup>13,14)</sup>に従って山口県熊毛郡室積町大字室積浦百四拾番地とされてきたが、正しくは山口県熊毛郡室積浦百四拾番屋敷(現・山口県光市室積町)である(図3)<sup>18)</sup>。

### 第2節 本籍地の移動

上述のように松岡の本籍地は山口県であるが、京都帝国大学の公的記録である『京都帝国大学一覽』の「医科大学 職員」欄には、在任中一貫して「出身 北海道」と記載されている<sup>19)</sup>。

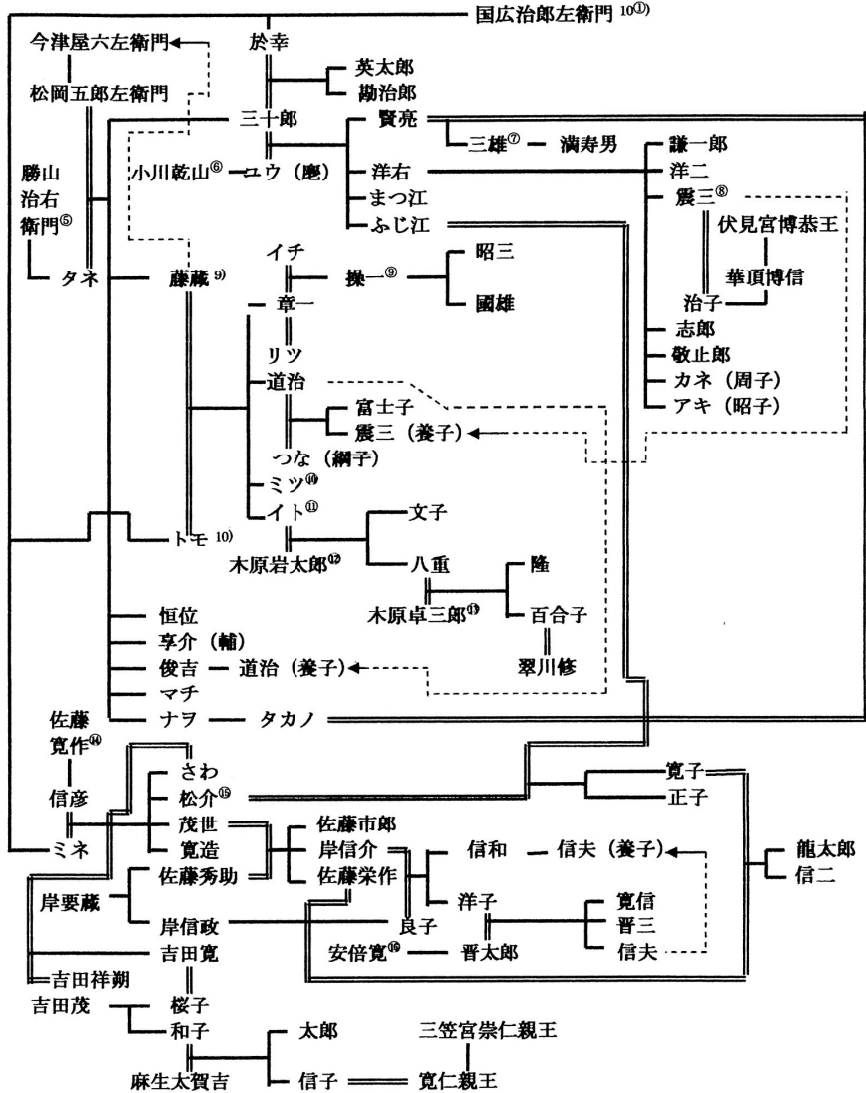


図1 家系図 (＝夫婦, —子女, ---養子)<sup>11)</sup>

それに基づいたためか、明治42(1909)年発行の人物評<sup>20)</sup>には「北海道北見国礼文郡香深村(現・北海道宗谷支庁礼文郡香深村)に生れ」と記載されており、退官直前の大正2(1913)年発行の人物評<sup>21)</sup>でも、「或る者は北海道で生まれたとも言え、中国の産だと云う者もある」が、「君を目して瀬戸内海の付近でうまれたかの人らしく想ふている」と記されている。

そこで溯って『帝国大学一覽』の「学生及生徒姓名」欄を見ると、明治29(1896)年の帝国大学第4学年<sup>22)</sup>までは、その出身地は一貫して山口と

なっているが、翌年から北海道に変わっている<sup>23)</sup>ので、その間に本籍地を移転したと考えざるを得ない。

今回松岡の戸籍<sup>8)</sup>を閲覧することが許されたので精査すると、松岡は明治29(1896)年12月19日に上記北海道礼文郡香深村百二十一番地へ転籍し、明治42(1909)年10月22日に旧住所へ復歸していることが明らかとなった。従って、上記『京都帝国大学一覽』の明治43年度以降の記載<sup>19)2)</sup>は誤りであることが分かった。

松岡の本家は上述のように代々廻船問屋であ

年	月	日	學業官職賞罰等
明治三年	七月		第三高等學校豫科卒業
自今に至る	七月		獨逸語學專修
今廿五年	七月		第一高等學校卒業
今廿五年	三月		帝國大學醫科大學卒業
今廿五年	一月		醫科大學副手囑託ス
今廿五年	五月	廿日	任醫科大學副手 八級俸任シ
今廿五年	六月		大學院入學ス
今廿五年	八月	十五日	醫學博士學位受取ル
今廿五年			帝國大學
			當該官衙等

本籍 山口縣熊毛郡室積浦大字室積浦  
 第百四拾番地并氏  
 松岡道治  
 明治四年二月廿日迄

図2 履歴書<sup>13,14)</sup>

り、室積浦では北海道との取引が盛んであった<sup>9,24)</sup>ことから、北海道、とくに礼文島の海産物問屋との間に何らかの取引があり、その縁故を頼って一時転籍したと考えられる。

### 第3節 北海道移籍の理由

北海道への移籍については、夏目漱石による徴兵忌避のための北海道移籍が有名である<sup>25)</sup>。松岡の移籍もまた漱石と同じく卒業前年（明治29〔1896〕年）であり、移籍先も同様に北海道であったが、その理由は漱石の意図した徴兵忌避ではないと判断出来る。

その理由として先ず、次男である松岡は13歳（明治15〔1882〕年）のときに叔父俊吉の家督を継いでいる<sup>8,26)</sup>が、この時期は、国民皆兵を定めた徴兵令（明治6〔1873〕年）の「一家ノ主人タル者」あるいは「養子」の兵役免除が、「戸主」「年齢五十歳以上ニシテ嗣子ナキ者ノ養子（嗣子）」と改正された（明治12〔1879〕年<sup>27,28)</sup>）あとである。養父俊吉は安政3（1856）年生まれである<sup>8)</sup>ので明治29（1896）年には40歳になっていて、養子松岡の兵役免除の条件を満たしていない。

しかもこの免除条件は、他の徴兵免役制や猶予制とともに明治16（1883）年の改正<sup>28,29)</sup>を経て、明治22（1889）年、すなわち松岡転籍の7年前の大改正によってすべて撤廃されていたのである<sup>28,30)</sup>。

第二に北海道における徴兵令施行は、前述<sup>25④)</sup>のように明治31（1898）年には千島を含む全道に拡大されるに至っている。従って、明治25（1892）年の漱石の場合と異なり、明治29（1896）年に松岡が北海道へ移籍した時には、徴兵制が早晩全道へ拡大することは当然予測されていたところである。

これらのことから、明治29（1896）年の本籍移籍は徴兵忌避を目的としたものではないと断言できるが、その真意は不明と言わざるを得ない。

## 第4章 むすび

松岡道治の家系、出生年月日、本籍地、さらに本籍地の移動について入手し得た資料を検討し、従来の伝えられてきた誤りをたどることが出来た。すなわち松岡は華麗な家系に明治2（1869）年11月2日（新暦同年12月4日）、山口県熊毛郡室積浦百四拾番屋敷に生まれた。本籍地は、その理由は定かではないが明治29（1896）年に北海道北見国礼文郡深村へ移され、明治42（1909）年に出生地へ復したことも明らかにすることができた。

### 謝辞

稿を終るに当たり、貴重な資料を多々ご教示賜った松岡道治先生ご親族の翠川百合子（京都市）、松岡昭三（大阪市）、松岡国男（兵庫県川西市）の諸先生、郷土史家国広哲也氏（山口県光市）、福岡整形外科病院顧問小林晶博士、種々ご便宜を図って頂いた山口県立図書館、山口県立文書館の職員各位に深甚の謝意を表したい。

なお上記松岡道治先生親族各位からご提供頂いた個人情報の取り扱いに就いては細心の注意を払ったつもりであるが、なお不適切なところがあるとすれば、その責は筆者が甘んじて受けねばならないと考えている。

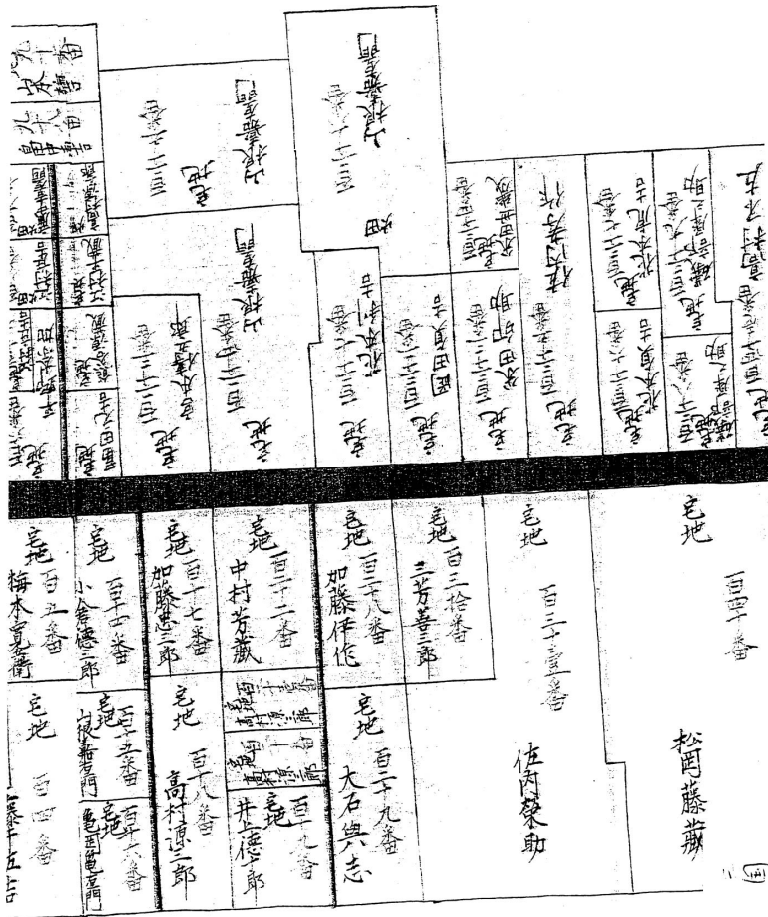


図3 本籍地の畑宅地絵図<sup>18)</sup>

### 注記及び引用文献

- 1) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第一報 京都大学整形外科学教室の創立. 日本医史学雑誌 2005; 51(3): 38-406
- 2) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第二報 松岡道治の学術論文. 同上誌 2006; 52(3): 361-393
- 3) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第三報 著書について. 同上誌 2009; 55(1): 43-55
- 4) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第四報 医師および市民への講演活動. 同上誌 2010; 56(1): 25-38
- 5) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第五報 松岡教授の教室員と受け入れ内地留学生. 同上誌 2010; 56(3): 351-366
- 6) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松

岡道治の事績, 業績 第6報 松岡の留学と教室の披露, 評価, 実績. 同上誌 2011; 57(1): 3-17

- 7) 廣谷速人. 京都大学整形外科学教室初代教授 松岡道治の事績, 業績 第七報 松岡道治の学歴—小学校から大学院まで. 同上誌 2011; 57(4): 403-418
- 8) 松岡家戸籍謄本三通 (戸主: 松岡藤藏, 同章一, 同道治). 私信, 松岡昭三 [大阪市]・国雄 [西宮市] 両氏, 平成22年5月28日).
- 9) 父松岡藤藏は, 廻船回線問屋今五<sup>①</sup>を代々営む松岡五郎左衛門の次男で天保12 [1841]年10月の生まれである. 嘉永2 (1849)年に一族の松岡六左衛門 (松岡五郎左衛門の父, すなわち松岡の曾祖父)の養子となり, 長じては山口県熊毛郡室積浦第二百三十一番屋敷で酒造業「三国屋」を営み, 明治20 (1884)年9月に室積浦四一五番屋敷へ転居した<sup>8)</sup>. のち京都へ移住し, 大正14 (1925)年長男章一宅 (京都市上京区浄土寺真如町)で死去した<sup>8)</sup>.

①今津屋は名の知られた回船問屋で多数の蔵を持つ

ち、両替もその業としていた<sup>④</sup>。松岡の曾祖父六左兵衛の時代（文政8〔1825〕年に庄屋格を与えられ帯刀を許され<sup>⑤</sup>、その孫（松岡の伯父）今津屋三十郎は明治3（1870）年の藩政改革にあたり特に名字を許されて<sup>⑥</sup>、「松岡」姓を名乗った。

【③三輪公忠，斜陽の豪家（第一部 国際舞台への登場まで 一章 生い立ち）。松岡洋右 その人聞と外交。中公新書256。中央公論社；1971。p.14-16 ④阿野政晴著兼発行。第3章 松岡洋右の家系と室積での生活。移民史氏から見た松岡洋右の少年時代；1994。p.31-43 ⑤デービッド・J・ルー（長谷川進一訳）。少年時代（第一章 山口における少年時代）。松岡洋右とその時代。東京：TBS・ブルタニカ；1981。p.18-20 ⑥光市史編纂委員会編。「今五」と「今六」（近世のひかり一海の利用と大川の効用一，室積のまち，五 港町の生活，回船問屋）。光市史。光市；1975。p.310-312 ⑦内閣官報局編集兼発行。太政官布達第六百八号，九月十九日（自今平民苗氏被差許候事（いわゆる平民苗字許可令）。明治三年 法令全書；1887。p.359）

- 10) 母トモは弘化2（1845）年1月，周防国徳山村（現・山口県周南市）の士族，国広治郎左衛門<sup>①</sup>の三女として生まれ，文久元（1861）年に結婚した。大正6（1917）年に京都市上京区吉田中大夫路町16番地（松岡道治宅）で死去した<sup>8)</sup>。

①国広治郎左衛門は徳山藩の茶道格<sup>②</sup>（切米20石）を務め<sup>③</sup>，その養子，国広八助は維新後山口県都濃郡太華村（現・周南市大字櫛ヶ浜）で酒造業を営んだ<sup>④</sup>（私信。国広哲也，平成19年8月29日）。

【②徳山藩では茶道は祐筆，膳部，別当とともに四座と称して技芸を以って仕えて土席班に属し，現米石5～6石三人扶持であって，茶と花道，殿中の装飾などを司る役であった（徳山市史編纂委員会編。第二節 階級制度と給禄〔第四編 近世の徳山，第三章 藩政の整備。徳山市史下。徳山市役所；1960。p.240-248〕。③徳山藩御家頼分限帳；1812（周南市：マツノ書店；1974）。④吉田真夫。徳山毛利家文庫「譜録」について（その二）。山口県文書館研究紀要2011；23：75-90 ⑤井関九郎。国廣八助君。現代防長人物史地。東京：発展社；1919。p.545（く51）】

- 11) 家系図。私信（翠川百合子，平成17年6月21日）のほか，松岡の戸籍<sup>8)</sup>や下記資料<sup>①</sup>、<sup>②</sup>、<sup>③</sup>、<sup>④</sup>を参照して作成したが，一部は省略した。

①安倍洋子。佐藤・岸・安倍家の系図。わたしの安倍晋太郎 岸信介の娘として。東京：文藝春秋；1922。p.190-191

②山口県文書館内山口県地方史学会編修。田布施佐藤家略系。佐藤寛作手控。佐藤栄作；1975。p.175-179

③阿野政晴著兼発行。第3章 松岡洋右の家系と室積での生活。移民史から見た松岡洋右の少年時代；1994。p.33-43

④松岡洋右伝記刊行会編。松岡家戸籍簿（生いたち）。松岡洋右：その人と生涯。東京：講談社；1974。p.22-23

⑤勝山治右衛門は萩藩の遠近方触流<sup>えんきんがたふれながし</sup>（三人高十七石五斗）<sup>⑥</sup>、<sup>⑦</sup>であって（私信。山口県立山口図書館総合サービスグループ，平成23年4月13日），弘化元（1844）年<sup>①</sup>から明治5（1872）年まで小河防村（現・光市小周防）で習字を教える寺子屋を開設していた<sup>②</sup>。

【②樹下明紀，田村哲夫編。分限帳；1885（萩藩給禄帳。周南市：マツノ書店；1984。p.408 ③石川卓美。遠近付。防長歴史用語辞典。周南市：マツノ書店；1986。p.44-45 ④文部省官房報告課編集兼発行。熊毛郡（巻二十四，寺子屋表，山口県，寺子屋表）。日本教育史資料 九 巻二十四；1892。p.202-211】

- ⑥小川乾山（通称，道平。文化6〔1809〕年—安政4〔1857〕年）<sup>⑧</sup>、<sup>⑨</sup>は徳山藩の学館鳴鳳館学頭<sup>⑩</sup>、<sup>⑪</sup>，蔵元評定役などを務めた。なお徳山毛利家文庫「譜録」には「小川家 75石，御馬廻」となっている<sup>10⑩</sup>。

【⑩宮崎一三八，安岡昭男。幕末維新人名事典。東京：新人物往来社；1994。p.237 ⑪富成博。小川乾山（中国地方（二），周防国（山口県），徳山藩（下松藩））。家巨人名事典編纂委員会編。三百藩家巨人名事典，第6巻。東京：新人物往来社；1989。p.徳山藩212-213 ⑫天明5（1785）年に創設された藩校で，嘉永5（1832）年に興讓館と改称された（小川富。藩校興讓館で学ぶ（第五章 明治の国際人・浅田栄次，学びの徒）周南風土記。東京：文芸社；2006。p.187-191） ⑬吉田祥朔。オガワケンゼン。増補近世防長人名辞典。徳山市：マツノ書店；1984。p.68】

- ⑦松岡三男（明治36〔1903〕年—昭和46〔1971〕年）<sup>⑭</sup>はサンフランシスコに生まれ，帰国して第五高等学校を経て昭和3（1928）年京都大学経済学部を卒業<sup>⑮</sup>，満鉄に入社し，戦後ハバロフスクで抑留生活を送る。第四代（昭和26〔1951〕年—29〔1954〕年），第七一九代（昭和35〔1960〕年—同46〔1971〕年）の光市長を務めた<sup>⑯</sup>。

【⑮中西輝磨。松岡三男。昭和山口県人物誌。徳山：マツノ書店；1990。p.255-256 ⑯京都大学事務局庶務課編。京都大学卒業生氏名録。明治33年—昭和33年。1956；p.542 ⑰光市史編纂委員会編。表3。光市歴代市長（現代のひかり—市政三十年のあゆみ—，二 市政の発足と戦時一色の市民生活西村市長時代—）。光市史；1975。p.752-753】

- ③松岡震三（大正12〔1923〕年—平成22〔2010〕

年12月<sup>⑧</sup>)は松岡洋朔右の三男に生まれ、昭和17(1942)年(武蔵高等学校高等科文科第3学年在学中<sup>⑨</sup>)に養子入籍した。昭和20(1945)年に応召、実父洋右から国宝級の軍刀を贈られたが、戦後シベリアに抑留された<sup>⑩</sup>。昭和27(1952)年に京大法学部卒<sup>⑪</sup>、同年住友金属工業へ入社、ニューヨーク事務所長、海外支配人を経て、昭和61(1986)年に専務、同63(1988)年に顧問、平成6(1994)年に社友に就任した<sup>⑫</sup>。妻治子(1934~)は、華頂博信の長女で慶大文学部、ハーバード大教育学部卒<sup>⑬</sup>。

【⑧松岡震三さん。朝日新聞。2010年12月17日；44770号；p.19 ⑨武蔵高等学校編集兼発行。松岡震三(第七章 生徒〔二六〇二年四月二十日〕、高等科文科 第三学年甲組)。武蔵高等学校一覽；1942。p.70 ⑩松岡洋右伝記刊行会編。9露国駐在、ロマノフ王朝の滅亡を予言す(外交官)。松岡洋右一その人と生涯。東京：講談社；1974。p.74-78 ⑪京都大学法学部有信会編集兼発行。松岡震三(昭和二十七年卒業)；1954。p.268 ⑫交詢社出版局編集。松岡震三。日本紳士録 第八十版。東京：ぎょうせい；2007。p.ま55】

⑬松岡操一は明治32〔1899〕年生まれ、初め京都市内開業歯科医堀内徹の門に学び<sup>⑭</sup>、大正4(1915)年に私立大阪歯科医学校へ入学、卒業<sup>⑮</sup>米国へ留学してDr. of D.S.を取得して大正14(1925)年に帰国、技工・継続架工学教室助教授に就任した<sup>⑯</sup>。昭和15(1930)年には教授(有床補綴学、矯正学)、昭和18(1933)年には附属医院副院長、昭和26(1951)年には兼任教授(歯科補綴学)として記載されている<sup>⑰</sup>。また昭和21(1946)年、歯科医師国家試験委員を務めた<sup>⑱</sup>。その後松岡病院の顧問を務め、京大整形外科教室近藤鋸矢教授に依頼して松江赤十字病院内藤一男整形外科医長を松岡病院へ迎えた。昭和35(1960)年京都大学より医学博士を授与されている<sup>⑲</sup>。

【⑭小川正一郎編集。堀内徹。日本歯科医事衛生史。日本歯科医師会；1910。p.106-108 ⑮大阪歯科大学同窓会名簿編集委員会。大阪歯科大学(明治45年2月~大正8年3月)。大阪歯科大学同窓会名簿1978年版。大阪歯科大学同窓会。1997。p.2 ⑯大阪歯科大学史編集委員会編修兼発行。義歯学教室。大阪歯科大学史 一；1981。p.418-420 ⑰榎原悠紀田郎。歯科医師試験関係略年表。2007。http://yukitaro.nomaki.jp/04a00\_070202.htm(平成23年2月24日参照) ⑱京都大学博士学位論文データベース(平成23年10月1日参照)】

⑲松岡ミツは慶応3(1867)年1月に長女として生まれ<sup>⑳</sup>、明治24(1891)年に山口県尋常師範学校の第一期生として卒業した<sup>㉑</sup>。のち京都に居住し、仏教に帰依して周囲の尊敬を集めていた(私信。翠

川百合子氏、平成23年5月13日)。

【⑳山口県師範学校編集兼発行。第一期卒業生(卒業生姓名)山口県尋常師範学校一覽。1899。p.107】

㉑木原イトは明治5(1872)年9月29日に次女として生まれた<sup>㉒</sup>。明治24(1891)年3月に第三期生として山口県尋常師範学校を卒業して<sup>㉓</sup>小学校訓導を勤めたのち、明治27(1894)年5月に木原岩太郎<sup>㉔</sup>と結婚した<sup>㉕</sup>。

夫と死別後は室積に居を移し、全郡医会看護婦養成所の講師兼舎監となった。その傍ら地元の小学校へブアオリン、国旗、図書標本などを寄付し、また赤十字社正社員、愛国婦人会特別会員として社会的に貢献し、家庭教育的にも模範的な暮しをしていた<sup>㉖</sup>。のち上洛し昭和19(1944)年に死去した<sup>㉗</sup>。

【㉒第三期卒業生(卒業生姓名)。注9⑧㉑。p.108

㉓鳥越亮(明治38(1916)年から2年間室積小学校校長を務めた〔光市立室積小学校著兼編集。室積小学校教育略史。室積小学校の教育100年；1968。p.8.9〕。教育熱心家 木原いと君(防長教育家 人物月旦 三)防長教育。1907；88:31-33(「山口県編集兼出版。6.防長教育家人物月旦、(2)木原いと〔山口県編集兼発行。第四章 教育と文化、第一節 教育〕。山口県史 史料編 近代2；2010。p.575-576〕へ全文引用されている)】

㉔木原岩太郎は慶応3(1867)年12月、周防国佐波郡佐和(現・防府市佐和)に生まれた。明治27(1894)年に帝国大学医科大学を卒業し、同年松岡の妹イトと結婚した<sup>㉕</sup>。卒業後母校外科学教室の助手<sup>㉖</sup>、熊本県球磨郡公立人吉病院長<sup>㉗</sup>、福岡病院外科部長<sup>㉘</sup>を経て明治32(1899)年東京帝国大学大学院へ進み<sup>㉙</sup>、皮膚科科助手に任ぜられた<sup>㉚</sup>。明治33(1900)年、京都帝国大学医科大学耳鼻咽喉科学教授予定者としてドイツへ留学したが、ベルリン到着直後に客死した<sup>㉛</sup>。

【㉒木原学士(人事彙報)。東京医事新誌1895；882:374 ㉓木原学士(人事彙報)同上誌1895；898:1077 ㉔福岡病院(福岡県)。内閣官報局編集兼発行。職員録 明治三十年(乙)；1897。p.319 ㉕東京帝国大学編集兼発行。木原岩太郎(第十八章 大学院学生姓名医科学生)。東京帝国大学一覽 従明治三十二年 至明治三十三年；1900。p.366 ㉖木原学士(人事彙報)。医事新聞1899；538:45 ㉗小田皓二。明治の留学悲話(上)一坂田快太郎の記録より一。日本医事新報 1993；3587:63-651 ㉘松浦医学士の書簡(雑報)。鎮西医報1900；45:32-35】

㉙木原卓三郎(明治25〔1892〕年一昭和44〔1969〕年10月)<sup>㉚</sup>は、千葉県木更津中学、第二高等学校を経て大正5(1916)年京都帝国大学医学部を卒業、

外科学教室へ入局したが、その後解剖学教室へ転じて、大正12(1923)年同教室助教授、昭和2(1927)年解剖学第二講座の教授となったが、同21(1946)年GHQの公職追放により退官、2年後に復職して同教室第三講座の教授を昭和30(1955)年に定年退官するまで続けた<sup>④</sup>。その間、昭和16(1941)年から同21(1946)年まで大阪女子医学専門学校校長を兼任し<sup>④</sup>、同30(1955)年から死去まで大阪医科大学教授を務めた<sup>④</sup>。

【④勿那将愛。木原卓三郎先生を悼みて。解剖学雑誌1970；45(3)：171-172 ⑤『第二高等学校一覧』の生徒名簿によれば、在学中の姓は「谷中」であったが、大正3年発行の『京都帝国大学一覧』では木原姓になっている(京都帝国大学編集兼発行。医学部第二年〔学生及生徒姓名、医科大学学生及生徒〕。京都帝国大学一覧 自大正三年至大正四年；1914。p.290〔前年の同誌は欠〕 ⑥日本解剖学会百周年記念事業実行委員会・記念出版委員会・教室史編集委員会編。京都大学医学部。京都大学医学部。日本解剖学会百年のあゆみ：日本解剖学会100周年記念。日本解剖学会、1995。p.236-239 ⑦木原卓三郎。40周年によせる思い出。関西医科大学編集兼発行。関西医科大学四十年の歩み。1968。p.207-208 ⑧羽野壽。大阪医科大学50年史編集委員会編著。4木原卓三郎教授(教室史、解剖学教室)。大阪医科大学50年史；1985。p.143】

④佐藤寛作(信寛)(文化12〔1816〕年一明治33〔1900〕年)<sup>④</sup>は藩の役職を歴任し、明治3(1870)年から明治9(1896)年まで浜田県、益田県の権知事・権令、島根県令を務めたが、明治11(1878)年に退官し、熊毛群麻郷村戎ヶ下(現・山口県熊毛郡田布施町麻郷戎ヶ下)に閑居した。

【④山口県文書館内山口県地方史学会編。蝦洲翁事略。佐藤寛作手控。東京：佐藤栄作；1975。p.174】

⑤佐藤松介(明治10〔1877〕年一明治42(1909)年)は、山口高等学校予科<sup>⑤</sup>を経て明治36(1903)年東京大学医科大学を卒業し、産婦人科学を専攻、同大学助手を経て明治39(1906)年~同42(1909)年、岡山医学専門学校(現・岡山大学医学部)産婦人科学教授を務めた<sup>⑤</sup>、<sup>⑥</sup>が、肺炎により早世した。岸信介は岡山市内の尋常小学校4年から岡山中学校2年まで同家へ寄宿していた<sup>④</sup>。長女寛子は佐藤栄作を婿に迎え、佐藤本家を継いだ。

【④山口高等学校編集兼発行。第八回 明治三十一年七月卒業(卒業生)。山口高等学校一覧 自明治三十二年九月至明治三十三年八月；1899。p.104-105 ⑤日本杏林社編集兼発行。佐藤松介(岡山岡山市)。日本杏林要覧 前編 医籍。1909。p.913 ⑥岡山大学医学部百年史編集委員会編

集。産科婦人科教室。一教室の人事(第三部 教室及び附属機関の沿革、第二章 臨床医学教室)。岡山大学医学部百年史。岡山大学医学部創立百周年記念会；1972。p.532 ⑦岸信介。岡山の思い出。我が青春：生い立ちの記／思い出の記。東京：廣濟堂出版；1983。p.45-64】

⑥安倍寛(明治27〔1894〕一昭和21〔1946〕)<sup>⑥</sup>は山口県大津郡日置村(現・長門市日置)の大庄屋、酒・醤油醸造業の家に生まれ、大正10(1921)年東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、昭和8(1933)年から同21(1946)年まで村長を務め、同年に衆議院議員に当選し、議員を2期務めた。

【⑦日置町史編集委員会編。安倍寛(付録 日置町の人物)日置町史。山口県日置町；1983。p.839-840 ⑧中西輝麿。安倍寛。昭和山口昭和山口県人物誌。徳山：マツノ書店；1990。p.51】

12)内藤一男(大正4〔1915〕年一平成4〔1992〕年)は兵庫県出身で、兵庫県立第一神戸中学校(現・兵庫県立神戸高校)、第六高等学校を経て、昭和14(1939)年に京都帝国大学医学部を卒業した。卒後外科整形外科学教室へ入局したが、翌年応召<sup>①</sup>、陸軍軍医として中国大陸の凄惨な最前線で医療活動が続けた<sup>②</sup>。昭和21(1946)に復員、昭和26(1951)年に松江赤十字病院整形外科医長から松岡病院へ転じ、昭和28(1953)年の松岡院長没後は同院院長として昭和47(1972)年4月の廃院まで勤務し、その後近くに内藤外科整形外科病院を開業した。

①内藤一男(副手)(人事異動 教室別人事異動 外科)。芝蘭会雑誌1940；5:31

②内藤一男編集兼発行。鷲兵団野戦病院 第一百師団野戦病院の記録；1991。

13)内藤一男。松岡道治先生の思い出。京都大学医学部整形外科学教室編集兼発行。京都大学医学部整形外科学教室開講80周年記念誌。京都大学医学部形成科学教室；1986。p.6-15

14)内藤一男から天児民和九大名誉教授に送られた松岡履歴書コピー(私信。小林晶博士、平成15年11月14日)

15)第一高等学校編纂兼発行。第二〇章 生徒姓名予科 独第一級。第一高等学校一覧 自明治二十三年至二十四年；1891。p.100-101

16)第一高等学校編纂兼発行。第二一章 生徒姓名三部第一年。第一高等学校一覧 自明治二十四年至明治二十五年；1892。p.110-112

17)第一高等学校編纂兼発行。第二五章 生徒姓名三部第2年。第一高等学校一覧 自明治二十五年至明治二十六年；1893。p.120-121

18)副戸長小河内栄次郎、畔頭津村嘉吉。第六大区四小区室積浦畑宅地絵図(明治六年西九月地券)。(国広哲也氏提供、平成17年6月9日)。本籍地の地名、室積浦は、江戸後期に室積村から室積浦として分離

したが、明治4(1871)年に山口県熊毛郡室積浦となり、明治22(1889)年に室積、牛島とともに室積村の大字、すなわち山口県熊毛郡室積町大字室積浦となった<sup>①、②</sup>。

なお、明治5(1871)年施行の戸籍法(壬申戸籍)では「臣民一般番号ヲ定メ其住所ヲ記スル、スベテ何番屋敷ト記シ」と定められた。しかし明治19(1886)年に改正され(「戸籍取扱手続」「戸籍登記書式等」)、「屋敷番制度」から「地番制度」に変わったが、完全に施行されるのは明治31(1898)年の「戸籍法」「戸籍法取扱手続」改正以降とされている<sup>③</sup>ので、松岡の上記履歴書<sup>11,12)</sup>はその頃以降に松岡自身によって書き直されたものであると断定できる。

①石川卓美. 市町村沿革一覧 熊毛郡. 防長歴史用語辞典. 山口: マツノ書店; 1986. p.504

②角川日本地名大辞典編纂委員会編(国広哲也). 室積. 角川日本地名大辞典. 35山口県. 角川書店; 1988. p.825-829

③速水融. 明治前期人口統計史年表 附幕府国別人口表. 日本研究1993; 9: 135-154

19) 明治34年度<sup>①</sup>から同45年度<sup>②</sup>までには出身地、族籍の記載がある。

①京都帝国大学編集兼発行. 外科学 松岡道治(第十五章 医科大学, 一 職員, 助教授). 京都帝国大学一覧 従明治三十三年 至明治三十四年; 1901. p.88

②京都帝国大学編集兼発行. 担当 教授 松岡道治(職員, 医科大学職員, 整形外科学教室). 京都帝国大学一覧 従明治四十四年 至明治四十五年; 1912. p.67

20) 衛生新聞社編集兼発行. 松岡道治君. 関西杏林名家集. 第一輯; 1909.

21) 青風白雨楼主人. 医学博士 松岡道治. 今のお医者. 東京: 神図書房; 1913. p.108-110

22) 帝国大学編集兼発行. 第三 医科大学学生及生徒医学科 第四年(第二〇章 学生及生徒姓名). 帝国大学一覧 従明治二九年 至明治三〇年; 1896. p.349-351

23) 帝国大学編集兼発行. 第三 医科大学学生及生徒姓名 医学科 卒業受験生(第二〇章 学生及生徒

姓名). 帝国大学一覧 従明治三〇年 至明治三一年; 1897. p.374-375

24) 開拓使編集兼発行. 室津港. 西南諸港報告書; 1882. p.491-508

25) 漱石は翌年の帝国大学卒業による徴兵猶子の期限切れを前に、明治25(1892)年に分家して北海道後志郡岩内村(現・岩内郡岩内町)へ送籍している<sup>①、②、③</sup>。北海道は、徴兵令の公布時(明治6[1873]年)にはその適用を除外されていたが、明治10(1877)年に函館、福山(松前)、江差で初めて徴募が行なわれ、明治29(1896)年には渡島、後志、胆振、石狩の4カ国、明治31(1898)年には千島を含む全道へとその実施地域が拡大された<sup>④</sup>。

①佐藤弥十郎編著. 文豪夏目漱石岩内に置籍(年代史, 明治時代, 明治二十五年). 岩内町史. 岩内町長長浜金太郎; 1911. p.289-290

②夏目鏡子著, 松岡讓筆録. 七 養子に行った話. 漱石の思い出. 東京: 角川書店; 1966. p.54-60

③丸谷才一. 徴兵忌避者としての夏目漱石. 展望. 1969/6月; 126: 142-163(玉井敬之, 藤井淑禎編. 漱石作品論集成. 第10巻. 東京: 桜楓社; 1991. p.104-124)

④北海道庁編集兼出版. 第三節 徴兵及志願兵(第九章 兵事). 道治一斑; 1911. p.206-209

26) 松田元介. 松岡道治, 防長人士発展鑑, 山口: 山書房; 1936. p.387

27) 松下芳男. 一 明治十二年の改正(第五章 徴兵令の改正, 第一節 明治十年代の改正). 徴兵令制定史 増補版. 東京: 五月書房; 1981. p.474-484

28) 加藤陽子. 表1 徴兵令の改正(その1), (その2)(III 徴兵制導入にあたっての論理と兵士の数). 徴兵制と近代日本1868-1945. 東京: 古川弘文館; 1996. p.46-49

29) 松下芳男. 二 明治十六年の改正(第五章 徴兵令の改正, 第一節 明治十年代の改正). 注27. p.484-495

30) 松下芳男. 明治二十二年の改正(第5章 徴兵令の改正 第2節 明治二十二年の改正). 注27. p.540-549